

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

### \*ガイドツアーアンケートの集計

国立天文台天文情報センターでは2011年6月からガイドツアーを始め、2012年4月からはその範囲を大幅に拡大し、日曜日のガイドツアーも始めた。国立天文台の前身である東京天文台では、筆者の知る限り1960年代(昭和30~40年代)にはガイドツアーを行っていた。毎週金曜日に正門に集合してもらい庶務係が何箇所かを案内していた。しかし、事務官のガイドであったため研究者側はこのガイドツアーに冷やかであったと伝えられている。このツアーが何時消滅したか定かでない。担当していた事務官が病気休暇に入り間もなく死去したため消滅したのではないかと思う。

それからずいぶんと年月が経って、2000年7月に国立天文台の常時一般公開が始まった。天文情報センターに教育系の教官が雇用され、天文公園構想をもっていたことから始まったのではないかと思っている。筆者はその頃、ハワイに建設していた大型光学赤外線望遠鏡「すばる」建設のためにハワイに赴任していたので詳しい事情は知らない。

筆者はハワイの「すばる」が完成し共同利用観測が始まったのを機に、帰国し太陽観測衛星Solar-B「ひので」の開発に加わり、その打ち上げ成功を見届け、とっくに定年を過ぎていたこともあり2006年10月をもって天文台を去る予定であったが、天文情報センターの公開事業に請われて参加した。

2006年度までの常時一般公開は国立天文台のごく一部の公開であった。見学対象は、第1赤道儀室(ツァイス製20cm屈折望遠鏡)、第1赤道儀室から大赤道儀室間の道路を使った太陽系ウォーキング、大赤道儀(ツァイス製65cm屈折望遠鏡)室を改装した国立天文台歴史館、太陽塔望遠鏡棟(アインシュタイン塔)外観、展示室であった。

2007年度からこの公開領域を2倍強に拡大する事業が行われ、新たに旧図書館の外観、レプソルド子午儀室外観、ゴーチエ子午環、自動光電子午環を加えることにした。この拡大事業の一環で筆者がレプソルド子午儀の存在を発見し、外観のみではなくレプソルド子午儀本体も見学の対象にしようと、レプソルド子午儀室、ゴーチエ子午環室、自動光電子午環室に見学用のガラス室を設けて見学が出来るようにした。この状態で常時一般公開を2010年度まで行っていた。

この常時一般公開では、建物の外観のみの見学、あるいはガラス越しの見学になっている場所があったので、筆者が提案者となり、入れない建物、ガラス越しの見学を中に入っただけの見学が出来るガイドツアーを実施することになり、提案者自らがガイドを務めて2011年6月に第1~第4火曜日の13時30分から15時までのガイドツアーが開始された。国立天文台の構内は広く見学対象も多く、それらをすべて案内するには4~5時間を要するので2回に分け、第1、第3火曜日は「登録有形文化財コース」(第1赤道儀室、太陽系ウォー

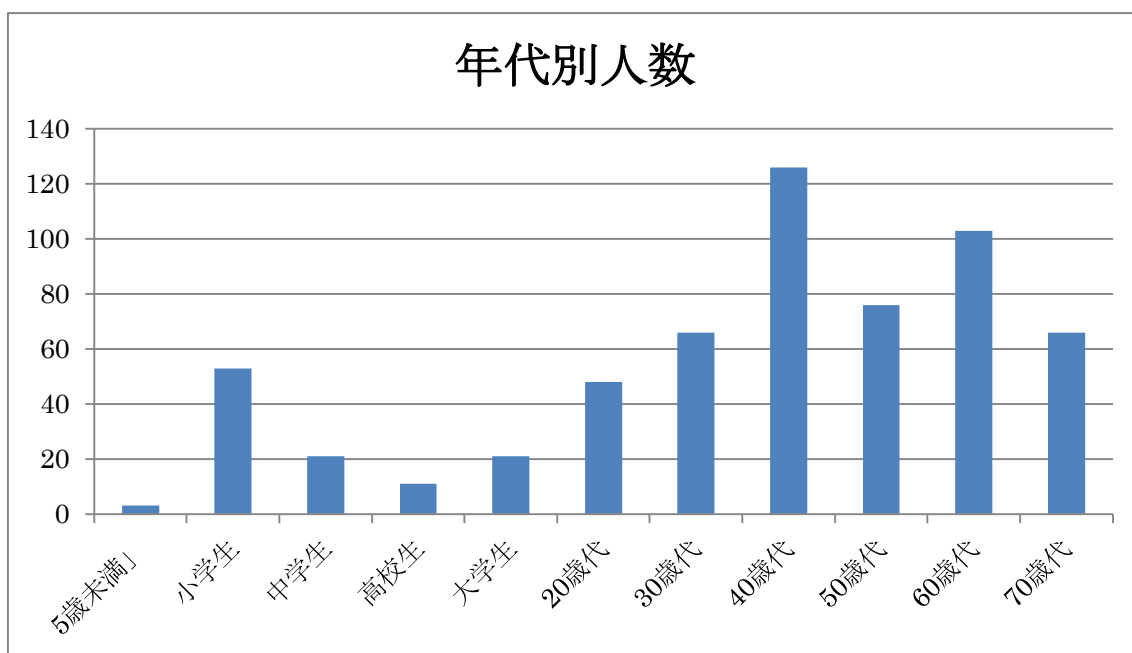
キング、太陽塔望遠鏡、国立天文台展示室)、第2、第4火曜日を「重要文化財コース」(日本の時刻決定モニュメント、旧図書館外観、子午儀資料館(レプソルド子午儀)、ゴーチエ子午環、天文機器資料館(自動光電子午環))として開始した。

しかし、このガイドツアーはウイークデイの火曜日に実施されていたため、学校に通う生徒、勤務のある人には門戸を閉ざしていることになり、休日の実施が強く要望された。そこで、またまた筆者が休日もやろうと提案し、2012年4月から第2、第4日曜日にも実施することになった。これを機に重要文化財コースに測地学関連遺跡めぐりを加えて重要文化財コースは、重要文化財・測地学関連遺跡めぐりコースと見学領域を約3倍に拡張した。また、この間にレプソルド子午儀は2011年6月に国の重要文化財に指定された。

これらの天文情報センター・アーカイブ室の活動の発展形態として国立天文台博物館構想が提案され、天文情報専門委員会の下に国立天文台博物館構想小委員会が設置された。今回の記事は、第2回国立天文台博物館構想小委員会に報告を求められた見学者のアンケートの集計結果である。

ガイドツアーは2011年6月から開始され、2012年11月までのアンケートが集計されている。ガイドツアーは年末年始と祝日と重なった火曜日は行っていないので、現在、71回が行われ、参加人数は644人である。

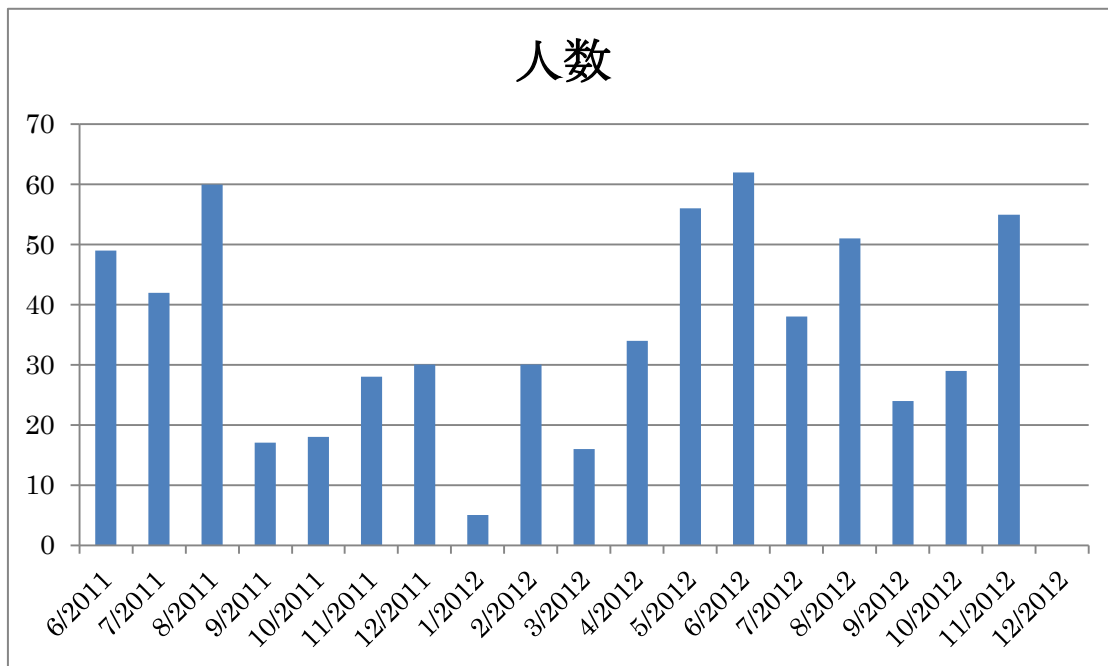
第1図は、ガイドツアーに参加した年齢別のデータである。



第1図 年代別参加人数

第1図で見ると、40歳代、50歳代、60歳代、70歳代と年配者が多いことが分かる。休日にもガイド付ツアーを行ってから小学生も加わるようになった。意外なことは中学生高校生が少ないことである。これも理科離れという現象が影を落としているように思われる。中学生の中には職場訪問の生徒が飛び入りした数も入っている。

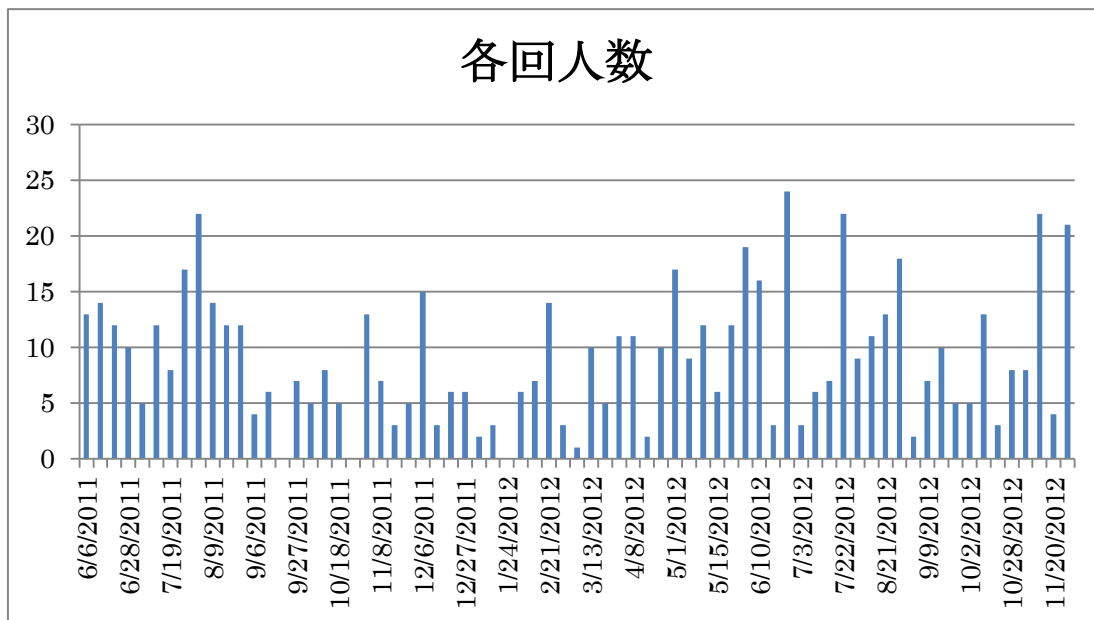
第2図は、開催月別の参加人数である。



第2図 月別参加人数

第2図で見るように、夏休み明けの9月、寒い期間の見学者が少ないことが分かる。また2012年は目を引く天文現象が多かったこともあり4~8月にかけて見学者が多い。2011年6月~2012年11月の月平均参加者は36人である。

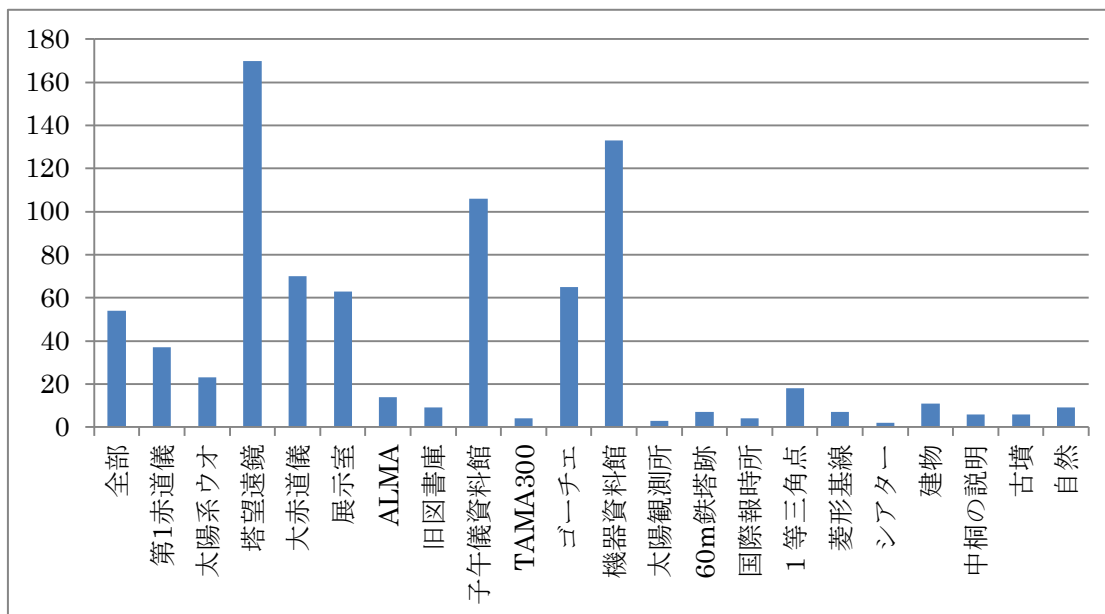
第3図は、毎回の参加人数のグラフである。



第3図 毎回の参加人数

1回の参加平均人数は9.6人である。定員は20人であるから半分に満たないことが分かる。

第4図は、興味深い施設を訪ねたデータである。



第4図 とくに興味深かった施設

第4図は、2012年4月から新たに加わった施設が後半に並んでいる。全てが同じ条件ではないので、測地学関連施設に興味がないとは言えない。特徴的なことは、太陽塔望遠鏡、子午儀資料館、天文機器資料館がダントツに人気が高いことである。

アンケートには、これらとは別に見学の感想を自由に書いてもらう項がある。これらは集計することが容易ではないが、以下に3回分くらいの感想を列記させていただいた。毎回このような感想が寄せられるとお考えいただいてよい。

ガイドツアー参加者の声

- 1) 中桐氏の情熱あふれるガイドに感激しました。
- 2) 天文観測の知識を学び、再度見学にきたい。
- 3) 測地学という研究分野の奥深さを初めて知りました。
- 4) 博物館の完成を楽しみにしています。
- 5) 古い望遠鏡などの展示物。長い歴史を知る（見る）ことができたのがよかったです。説明してくださる先生の情熱を大変感じました。機会があれば、野辺山天文台にも行ってみたいと思いました。
- 6) なかなかふだんみられないところにつれていってもらって面白かった。
- 7) 一般公開では、それほど注意深くみていなかったのですが、わかりやすく説明していただくことで、古い機器にもいろいろ逸話があることがわかり、楽しかったです。
- 8) 貴重なものがバラバラにならず保存、整理されていて、ぜひ続けていってほしいです。
- 9) 天文台博物館が早く実現して、コロナグラフが組み立てられた状態で見てみたいです。
- 10) 今後も見学ができるところが増えると良いです。

- 1 1) 二回目のツアー参加でしたが、とても楽しく見学させていただきました。ありがとうございます。
- 1 2) 語り口が楽しかった。
- 1 3) 日本の天文学の原始からの歴史全ての博物館を造られて、必ず残して下さい。絶対にあきらめずに頑張ってください。
- 1 4) ガイドツアーでの説明で大変詳しく理解できました。何回参加しても楽しいです。
- 1 5) さらに範囲を広げて見学したい。
- 1 6) 十分な説明で楽しい、そして理解しやすい内容でした。
- 1 7) 古い望遠鏡を多く見られたのと、現在までの歴史的な経緯を説明いただいたのが興味深かったです。ありがとうございました。
- 1 8) 中桐先生の博識に感動しました。自分も物理の勉強をしておけばもっと理解が深まったと思い、少し残念な気持ちです。ありがとうございました。
- 1 9) 分光器室の分光器でスペクトルが見てみたいです。太陽でなくてもハロゲンランプの光でも。今回は歴史を感じるツアーでした。丁寧なガイドで分かりやすかったです。
- 2 0) 幅広い知識に基づく説明をありがとうございました。ガイドツアーの中でも季節感（その時期の星空の説明など）が出せるとより充実した、ものになると思います。
- 2 1) 古墳も見なかったです。天文台の中は自然がいっぱいで歩いているだけで気持ちよかったです。
- 2 2) 草がいっぱい生えていて、バッタがいっぱいたいたのでおもしろかったです。
- 2 3) 自然がたくさんある中でのツアーで、子供にも楽しめたよいツアーだと思います。
- 2 4) 雨が降っていて、なかなか大変でしたが、天文学の歴史感ることが出来てよかったです。
- 2 5) 今まで知らなかった天文台と日本の天文学の歴史が詳しく知ることが出来て大変よかったです。次のガイドツアーにも参加したい。
- 2 6) できれば、実際に望遠鏡を覗きたかった。が展示物はとても興味深かった。
- 2 7) 説明を聞いて本当によかった。1人の見学ではあまり興味が持てなかったと思う。
- 2 8) 夢があり、壮大な話、楽しかった。中桐さんが本当に好きでこの見学会をやってくださっているのだと感じました。
- 2 9) ガイドの方の熱意が伝わって来た。雨の中、ご丁寧な説明で楽しく勉強させていただきました。どうもありがとうございました。

これらの感想でみるように、国立天文台に残された歴史的遺産を今後も大切に未来に向かって保存を望む声、博物館構想の実現を望む声大きいことがわかる。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)